

主な出展リスト

- ◆ セルゲイ・ディアギレフ肖像(サイン入り) (PA-06) (AU-90)
- ◆ セルゲイ・ディアギレフ肖像 / 画: レオン・バクスト / 原画は1906年 (SA-13)
- ◆ セルゲイ・ディアギレフ肖像 / 画: ミハイル・クルニン / 1991年(ジャン・コクトーのスケッチ(1954年)へのオマージュか) (PA-07)
- ◆ 情報誌「セルゲイ・ディアギレフ家系図」[「ウラルのパレエ」/ロシア / 1989年5月(ディアギレフ没後60周年) (Doc-NP-10-2)]
- ◆ メダル / 「セルゲイ・ディアギレフ賞」/ ヘルミ国際パレエコンペティション / ロシア / 1992年 (ME-02)
- ◆ トロフィー / 「セルゲイ・ディアギレフ賞」/ ヘルミ国際パレエコンペティション / ロシア / 1992年 (ME-03)
- ◆ 煙草カード (GB-01)
- ◆ 切手 / 「セルゲイ・ディアギレフとダンサーたち」/ モナコ: モンテカルロ / 1986年 (ST-BL-51)
- ◆ 書籍 / 大田黒元雄 / 「露西亞舞踊」/ 日本: 音楽と文芸社 / 1917年 (BK-1080.br)
- ◆ 雑誌 / コミック「ニジンスキー: 魔法のダンサー」[「ヴィダス・イリュストレス」/ メキシコ / 1969年9月1日 (MG-0519)]
- ◆ 限定書籍 / 「セルゲイ・ディアギレフ劇場(うるさがた)」/ 舞台美術・衣装: ジョルジュ・ブラック / フランス / 1924年 (AB-29)
- ◆ 限定書籍 / 「セルゲイ・ディアギレフ劇場(牝鹿)」/ 舞台美術・衣装: マリー・ローランサン / フランス / 1924年 (AB-30)
- ◆ 限定書籍 / 「絵でみるセルジュ・リファールの人生」/ 画: ジョルジュ・アウグスブルグ / フランス / 1937年 (AB-26)
- ◆ 原画 / 「ブルチネッラ」/ 衣装: パブロ・ピカソ / 1920年頃 (PA-05)
- ◆ ポスター / モナコ: モンテカルロ劇場 / 1929年5月11日 (PO-18)
- ◆ パレエ・リュス公式プログラム各種 (PRBROF)

主な参考文献・資料

- ◆ セルゲイ・グリゴリエフ (薄井憲二監訳) 『ディアギレフ・パレエ年代記1909~1929』平凡社 / 2014年
- ◆ セゾン美術館・一條彰子 (編) 『ディアギレフのパレエ・リュス展1909~1929—舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち』セゾン美術館 / 1998年
- ◆ 海野弘 (解説・監修) 『華麗なる「パレエ・リュス」と舞台芸術の世界—ロシア・パレエとモダン・アート』バイインターナショナル / 2020年
- ◆ 小倉重夫 『ディアギレフ—ロシア・パレエ団の足跡』音楽之友社 / 1978年
- ◆ 芳賀直子 『パレエ・リュス—その魅力のすべて』国書刊行会 / 2009年
- ◆ 森瑠依子 『パレエの栄光の歴史がきらめく(薄井憲二パレエ・コレクション)の逸品を訪ねてその1~4』『Chacott Web Magazine DANCE CUBE』 / 2016~2017年 / <https://www.chacott-jp.com/news/column/others/detail000338.html>
- ◆ ヴィヴィアナ・デュランテ (総監修)・森菜穂美 (日本語版監修) 『パレエ大図鑑』河出書房新社 / 2019年
- ◆ 薄井憲二 『パレエ千一夜』新書館 / 1993年
- ◆ Serge Diaghilev: Ballets Russes (CD) Warner Classics / 2022

Kenji Usui Ballet Collection

Sergei Diaghilev's 150th Birth Anniversary ~ The Great "Ballets Russes" Impresario ~

2022/7/26 (Tue.) ~ 2022/8/28 (Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

◎ 企画・監修

関典子(せき・のりこ / 薄井憲二パレエ・コレクション・キュレーター)

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊研究者・幼少よりクラシックパレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞など受賞。

アシスタント: 若林絵美 (Emi Wakabayashi) 後藤俊星 (Shunsei Goto)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二パレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二パレエ・コレクション
2022 企画展

セルゲイ・ディアギレフ 生誕150周年

~ 偉大なる「パレエ・リュス」団長 ~

2022/7/26 (Tue.) ~ 2022/8/28 (Sun.)

20世紀初頭に一世を風靡した「パレエ・リュス」(フランス語で「ロシア・パレエ団」の意)。本年2022年は、このパレエ団を率いた興業主、セルゲイ・ディアギレフの生誕150周年にあたります。パレエ・リュスの旗揚げは1909年、パリ。1929年にヴェニスで死すまでの約20年間、欧米各地で60作品以上もの新作を上演。パレエを時代遅れの娯楽から、最先端の総合芸術へと、一気に押し上げたのです。

パレエ・リュスは、ディアギレフの采配ゆえに成立したパレエ団でした。ほとんど魔力とも言えるような彼の魅力に惹き付けられて、才能あふれる芸術家が大集結したのです。詩人コクトー、作曲家サティ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ドビュッシー、ラヴェル、美術や衣装では、ピカソ、ローランサン、シャネルなどなど……。その慧眼ぶりは、彼らの名前を連ねるだけでも、十分に理解していただけることでしょう。歴史に名を残す数々の芸術家たちが、ディアギレフやパレエ・リュスとの仕事を通して才能を発揮したのです。

本展では、ディアギレフゆかりの品々を中心に、パレエ・リュス全60作品あまりを、年譜と共に総覧します。

Hyogo Performing Arts Center

セルゲイ・ディアギレフの年譜

Sergei Diaghilev 1872.3.31 Novgorod ~ 1929.8.19 Venice
 1872年3月31日 ロシアのノヴゴロドに生まれ、1929年8月19日 イタリアのヴェニスに死す。

- 1872年(0歳)—— 3月31日、ロシアのノヴゴロドで誕生。ディアギレフ家はウォッカの製造で財を成した地方貴族だった。父は軍人、母は出産の数日後に死去。父の再婚に伴いベテルブルクで幼少期を過ごす。
- 1882年(10歳)—— ヘルミに移り、ギムナジウムに進学。
- 1890年(18歳)—— サントペテルブルク大学に入学(法律学)。一時、リムスキー=コルサコフに師事し、作曲も学ぶ。芸術サークルを立ち上げ、これが後のバレエ・リュス結成につながる。マリンスキー劇場で『眠れる森の美女』初演を鑑賞。
- 1896年(24歳)—— 8月、大学卒業。ロシアの芸術の後援者として身を立てることを決意。
- 1898年(26歳)—— 雑誌『芸術世界』創刊号を発行(1904年に廃刊)。
- 1899年(27歳)—— マリンスキー劇場の特別任務要員に迎えられ『帝室劇場年鑑』の編集に携わる(1901年、組織内の軋轢が原因で追放処分となる)。雑誌『芸術世界』主催の国際美術展を開催。1903年まで毎年開催。
- 1906年(34歳)—— パリのサロン・ドートンヌで、ロシア美術展を開催(第1回ロシア・シーズン)。
- 1907年(35歳)—— パリ・オペラ座で、ロシア音楽連続コンサートを開催(第2回ロシア・シーズン)。
- 1908年(36歳)—— パリ・オペラ座で、歌劇『ボリス・ゴドゥノフ』を上演(第3回ロシア・シーズン)。
- 1909年(37歳)—— 5~6月、パリ・シャトレ座にて、バレエ・リュス初公演(第4回ロシア・シーズン)。マリンスキー劇場の夏季休暇中、専属ダンサーやスタッフを借りて実現。



画:ジョルジュ・アウグスブルグ(1937)



大田黒元雄『露西亞舞踊』(1917)より

要するにディアギレフの露西亞舞踊團は其の革新的精神に富んで居る點と、藝術的な綜合的演出に成るところに成功した點とに於て、最も深い感銘を私に與へた藝術である。そして其の感銘の深きでかつた事は、舞踊音楽其他の各役割をつとめた人々の技巧が完全の域に達して居た事に歸因すると思はれる。舞踊に就ては我が國に於ても山田耕作君が舞踊詩を作り出したけれども、舞踊並びに音樂の兩方面に當る人の技巧が極めて幼稚なため全然所期の效果を得る事を得ないで終つて居る。そのやうな事を比較して考へると此のディアギレフの一團の藝術の卓越して居る事を私はしつぱりと感ぜないで居られない。

1909~1929 バレエ・リュス

「天才を見つける天才」とも称されるディアギレフは、その審美眼を發揮して選んだ一流の芸術家たちを協働させ、数多の革新的な作品を世に送り出す。美術、音楽、文学、ファッション、そして振付家やダンサー。同時代の多彩な才能が集結した「バレエ・リュス」は、総合芸術としてのバレエを実現し、20世紀の文化に多大なる影響を与えた。解散後の団員たちは、ダンサー・振付家・指導者として各国で活躍し、今日に至るバレエの発展に寄与した。



画:レオン・バクスト(原画は1906)

- 1911年(39歳)—— ニジンスキーがマリンスキー劇場を退団し、ディアギレフと共に祖国を去ったことにより、「バレエ・リュス」の名称が定着、恒久的なバレエ団となる。
- 1913年(41歳)—— 8月30日、ニジンスキーが婚約を発表(ディアギレフが同行しなかった巡業中の船上)。9月10日、ブエノスアイレスで挙式。恋人でもあったディアギレフは、このことを電報で知らされる。その冬、ニジンスキーに電報で解雇通告。
- 1918年(46歳)—— 唯一、初演作品のない年。ロシア革命などの影響により、しばらく巡業先のスペインから出られなくなったため。
- 1921年(49歳)—— 11月2日、ロンドンのアルハンブラ劇場にて『眠れる森の美女』上演。ロシア帝室バレエの至宝を伝える悲願でもあった。豪華絢爛な舞台上で破産寸前に追い込まれるが、その後、モンテカルロを主たる拠点とすることができ、救われる。
- 1929年(57歳)—— 8月19日、糖尿病のため、保養先のヴェネツィア、ホテル・デ・バンにて、客死。サン・ミケーレの墓地に埋葬される。葬儀はシャネルが取り仕切り、費用も全額負担した。ディアギレフの死と共に、バレエ・リュスは解散。8月4日、フランス、ヴィシーでの公演が、バレエ・リュスの最終公演となった。

セルゲイ・ディアギレフの言葉 (1895年、継母に宛てた手紙より)

- 第一に、私は相当なベテランです……
 - 第二に、私は相当な人たらしです。
 - 第三に、私はかなり度胸があります。
 - 第四に、私はかなり論理的な男ですが、たいした信念は持ち合わせていません。
 - 第五に、私は才能に欠けていると思いますが……自分の真の天職を見つけたと思います。それは、芸術を支援することです……
- そのために必要なものはすべてある。金なら何とかなるだろう。

『春の祭典』(ストラヴィンスキー作曲)は、伝統的な要素が皆無の作品であり、初演時には激しく拒絶された。



「ハハ!恐ろしいことは、既に知っていました。」(ディアギレフ) 「新しいものは、いつも怖いものです。」(ストラヴィンスキー)



切手「ディアギレフとダンサーたち」モナコモンテカルロ(1986)



トロフィーとメダル「セルゲイ・ディアギレフ賞」ベルギー国際バレエコンペティション(1992)



煙草カード